

---

# 桜の森の満開の下

西くん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜の森の満開の下

### 【Nコード】

N6636S

### 【作者名】

西くん

### 【あらすじ】

三人の腐れ大学生の話

## 桃園の誓い

桜の満開の下、そして満月の下で、三人の男が杯を交わしていました。

「貴様ら！彼女との卑猥極まりないアーチを撮影した写真で俺の携帯の画像フォルダを満杯にするという野望は何処へ行った！」

そしてその内の黒髪の男（以後黒髪）が、夜空に虚しく咆哮しました。

「んなくだらない野望、お前の母親の子宮の中にしかないわ」

金髪の男（以後金髪）がヘラヘラと笑みを浮かべながら言い捨てました。

「お前ら、喧嘩などするな。我々の目的を忘れるでない」

二人の喧嘩腰な会話を遮るように、茶髪の男（以下茶髪）が言いました。

「我々がここに来たのは、泣き劉備三兄弟の桃園の誓いを我らが引き継ぐ事であろう」

そして眠そうに、茶髪はこう付け足しました。

何を隠そう茶髪の言う通り、この三人は『現代版桃園の誓い』を果たすためにここへ集まってきたのです。この三人は大学で出会い、泣き、後悔し、嫉妬し、怠惰しあつた仲なのです。

『そんな仲など不要である』と三人は思いつつも、彼らは腐りすぎて腐敗臭しか漂っていない腐れ縁というよりも臭いの帯と言う方が正しい帯で繋がっているために、互いから離れようとしてもその臭いでまた集まってしまふのです。形容するならば、ゴミに群がるハエです。

そんな彼らが『こんな中途半端な縁で良いのか』と疑問に思い始めたがために、急遽キウジュ四月の寒空の下でこの桃園の誓いは開かれたのです。

しかし急遽は急遽、突然の予定に三人の会話はあまり弾まず、む

しろ気まずい状態に追い込まれていつてしまいました。

それだけは避けようと、黒髪は焦りを隠しつつも話を繋ぐ事に必死です。

「いいか、貴様ら。この花見は『桃園の誓い』だ。『桃園の〜』とはなんとも卑猥極まりないとは思わんか」

それを聞いた金髪は、またもへらへらと気味の悪い笑みを浮かべながら言います。

「お前の頭の中は卑猥な知識しか詰まってないのか？これだから童貞は困る」

それを聞いた黒髪は黙っていません。

「な、なにおう！前半は合ってるとして後半はどういうことだ！貴様は俺が母の子宮から出てきた瞬間から俺のことを監視してきたとも言うのか！」

「じゃあ童貞ではないと？」

「勿論！」

そうかそうか、と金髪はへらへらと言いながら酒を呑みます。

ほぼ30分ほど沈黙が続いた後、

「今日何時まで居る気だ？明日の朝まででも俺は構わんが」

茶髪が、二時四〇分と表示されている携帯の待ち受け画面を見せながら言いました。

「よし、今日は解散」

黒髪が早々と諦めたように言うと、三人はバラバラに暗闇へ消えていきました。

## 金髪のお話

全く、今日は無駄な時間を過ごしてしまった。

何が『桃園の誓い』か。民を救うために立ち上がった劉備三兄弟に腹を切つて詫びるべきである。全く、一体なにを救おうとして何に誓つたのだ、我らは。

否、腐敗臭のする臭いの帯を固く結び合うことをありがた迷惑にも後一週間も生命が保持されぬであろう桜の花弁に押し付けただけではいか。

これから花見を目的にあそこへ行く人々は数知れず、つまり我らがあつた桜に固く結んだ腐敗臭を嗅ぐ人も数知れず、酒も食料も、更に人と人とを結ぶ縁もいつの間にかに腐つてしまうことであろう。

「否、四六時<sup>つた</sup>中鳶のように絡まりあつていようような男女であれば、雑草は刈り取るが如く腐り落ちてしまふが良い」

私は一人物騒なことを呟きつつ、家まで歩を進めた。

「……なんだこれは」

私ที่บ้านに付くと、そこには残酷的且つ悲惨的な動機が見られる景色が広がっていた。なんと、水彩絵の具がそこらじゅうにぶちまけられ、私の家具やら何やらを染めていた。

「しかし！」

酔っているとはいえ、それを美しい光景であると感じてしまう私  
が悲しかった。

「誰だ？ちゃんと鍵は閉めていたはず。」

貴重品は盗られてはいないと場所を見ると、どうやら犯人は愉快犯らしい。

『桃園の誓い』を馬鹿にしたことへの天誅だとすれば、この光景

がどれほど素晴らしく感じようとも、私は釘バットを作成して犯人のもとへと向かうのである。

「しかし、この綺麗さは芸術にすら感じる。どうやら犯人は私と美的感覚が合うらしい」

掃除するのは面倒だし、いつそのままの状態で一年ほど過ぎすのも悪くは無い。

「まあ掃除はするが、しかし明日の朝まではこの芸術を消す事はやめておこう。」

私は一つ大きな欠伸をし、幻想的な色の床で横になった。

## 金髪のお話？

「こ、これは……」

自動定期鼓膜破壊装置（旧名：目覚まし時計）によって私の不機嫌にも目を覚ますと、私の目の前にさらに怠惰を強制するかのような光景が広がった。

なんと、水彩絵の具が色とりどりに私の部屋を染め上げているではないか。80万円ほどしたエーロ・アールニオのポールチェアが、なんともカラフルに仕上げられている。

「まさか、奇襲でもされたのだろうか？」

しかし貴重品を取られた痕跡は見られないため、犯人は愉快犯であることは間違いない。しかし、そもそも私は人から恨みを買うようなことはしていないはずである。

「待て……落ち着け……」

## しばらく経過

「待て！これは昨日の夜に起こった出来事だ！」

記憶を巻き戻しすぎて赤子の時代まで戻り、あるうことかそれを懐かしんで昨日の夜に記憶を張り巡らせるまでの時間が掛かったのだが、しかし私は昨夜の出来事をアリアリと脳裏に蘇らせた。

「あの時はふざけた儀式の帰りと酒の酔いで事態を深くは受け入れてはいなかったが……しかし、日光の下だと尚更美しく見え……」

色々と回りくどい説明は抜きにする。

悲しかった。

結局、水彩絵の具を全て拭くのは昼まで掛かった。

終わった後、2時間も動いていないのに何故かこれから動くのがたまらなく億劫である。腹は減っているのだが、しかしそれでもフライパン片手にじゅうじゅうベーコンを炙ることにさえ抵抗があった。

そうと決まればさっさと寝ようと私が床に横たわったところで、床の素材に使われている木材の力のおかげかは知らないが、私の腐りきった脳に一つ思い当たることがあった。

ぶちまけられていた水彩絵の具は勿論私の家の物であり、しかもあの光景を見る限り相当な量を使われているハズである。

恐らくぶちまけられる直前まで水彩絵の具があったであろう部屋を漁ると、見事にゴミ箱から水彩絵の具が詰まっていたであろうチューブを数十個発見した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6636s/>

---

桜の森の満開の下

2011年4月26日22時55分発行